

種鶏における伝染性気管支炎 (IB) ウイルス特異遺伝子の検出事例

中山 晃子, 高橋 敏方

愛媛県東予家畜保健衛生所

平成23年4月に飼養羽数6,100羽の種鶏農場において、種鶏雛（シャモ♀）が羽毛の逆立ちや沈うつ症状を呈し、41日齢までに同ロット80羽のうち4羽が死亡、6羽を予後不良のため淘汰した。当該ロットは、35日齢で幼すう舎から中すう舎へ移動し、ワクチンはマレック病（0日齢）、鶏痘（0, 35日齢）、ニューカッスル病・IB（NB：5, 16, 35日齢）、伝染性ファブリキウス嚢炎（19, 26日齢）を実施していた。また同一鶏舎の2ロット200羽に異常は認められなかった。

衰弱した3羽について病性鑑定したところ、解剖では腎臓の腫大や退色が認められ、その他の諸臓器では肉眼的な異常は認められなかった。細菌検査では、有意な菌は分離されなかった。病理組織検査では、腎臓において尿細管上皮細胞の変性や壊死がみ

られ、尿細管間質にはリンパ球の浸潤が認められた。

また、気管の粘膜固有層に軽度のリンパ球浸潤が認められた。ウイルス検査では、IBウイルスのPCR検査を主要臓器および気管で実施したところ、腎臓で3羽中3羽、気管で3羽中1羽からIBウイルスの特異遺伝子が検出された。

検出されたウイルス特異遺伝子の由来を確認するため、制限酵素 *EcoR* I, *Hae* III, *PST* I を用いた RFLP 法を実施したところ、*Hae* III および *PST* I で切断され、当該農場にて使用しているワクチン株と切断パターンが一致した。

今回の症例は、NB 生ワクチン点眼接種時に、鶏舎移動や気温の低下などの環境の変化がストレスとなり、発育の悪かった雛がワクチンのリアクションによって死亡したことが示唆された。